

再びその人らしい生活に

# ふれあいひろば

2019年 春号 Vol.88

愛仁会リハビリテーション病院

三島圏域地域リハビリテーション  
地域支援センター

- 住所：高槻市白梅町5番7号
- 電話：072-683-1212
- URL：http://ajinkai.or.jp



- 1面 認知症サポーター養成講座について
- 2面 (連載) チーム医療活動のご紹介⑧ 装具検討会のご紹介 / 就任のご挨拶
- 3面 地域クリニックとの連携の中で②
- 4面 患者さまだより② / 在宅サービスセンターだより



## 認知症 サポーター 養成講座について

副院長 砂田 一郎

医療最先端国のわが国では認知症のことが大きな社会問題となっています。元々、先進国の中で認知症の割合が高い状態に加え、長寿に伴う人口の高齢化が拍車をかけています。2025年の認知症の患者数に関して、700万人だ、いや1200万人だといろいろな推計が出されていますが、いずれにしても認知症患者さんが増えることは確実です。

高齢の入院患者さんの3~4人に1人は認知症であるという報告があるように、私たちの病院でも認知症の患者さんが多く入院されています。中には、お一人で動こうとされたり、食事を食べられない日や、リハビリテーションに参加できない日があったり、夜間眠れなかったりと、様々な症状を呈し、私たち職員は24時間その対応をさせていただいております。

認知症は脳の病気であり、その患者さんに責任があったり、患者さんが悪かったりするわけではありません。認知症のことをきちんと理解し、親身になることが重要で、その一つの手立てが認知症サポーターなるシステムです。

認知症サポーターは、「認知症に対する正しい知識と理解を持ち、地域で認知症の人やその家族に対してできる範囲で手助けする」という一般の住民向けの資格で、厚生労働省が2005年から「認知症を知り地域をつくるキャンペーン」の一環として展開しています。当初の目標は1000万人達成で、2014年より急速に受講者数が増え、2018年12月末に1100万人となりました。認知症に対する国民の関心の高まりの反映と考えます。認知症サポーターになるには、

キャラバンメイトという資格を持った者からの講義を受けていただく必要があります。

「認知症フレンドリー」な法人を目指す愛仁会でも、内藤嘉之理事長のかけ声の下、多くの職員が認知症サポーターになる活動を展開中です。当院でも吉田和也院長の下、5名のキャラバンメイトが約550名の職員に対し2020年までに全員が認知症サポーターになるべく研修を展開中です。

また、当院3階にあるふれあい広場でも高槻市主催の認知症サポーター研修を予定しており、皆さま方のご参加を広くお待ちしております。

認知症サポーターの方にはオレンジリングをお渡ししております。オレンジリングを着けた方で町中がいっぱいになる認知症フレンドリーな地域にしていきたいという思いです。



# 装具検討会のご紹介

リハ技術部 理学療法科 竹井 夕華

病気やケガなどによって脚に障がいが残ると、歩行時にうまく身体が支えられず転倒したり、足部の変形が生じたりする恐れがあります。そんな時に役に立つのが『装具』です。装具の使用目的は実に様々です。身体機能の改善を図るため、歩行時の補助具として、足部の変形予防のため等々。患者様ごとに異なるニーズ、異なる身体機能に合わせたその方だけの装具を選定することが重要となります。

そこで、当院では入院患者様に医師、理学療法士、義肢装具士、社会福祉士といった多職種で協働して装具を検討する“装具検討会”を毎週月・木曜日に行っています。患者様の身体機能や歩行状態を実際に目で見て確認し、必要に応じて筋電図などを測定しながら医師や理学療法士、義肢装具士がそれぞれの専門性を活かして意見を出し合い、装具の選定を行います。義肢装具士は名前の通り装具の専門家です。医師や理学療法士だけでは不十分な力学的な観点からも患者様の歩行を分析し、より専門的な意見をもらうこと

ができます。

装具検討会では装具の選定以外にも、患者様にとってより良い歩行練習方法の提案も行っています。また、2019年3月より事故や病気によって下肢を切断された患者様向けに義足検討会も開始しました。今後も装具や義足を通じて患者様がより生き生きと過ごせるよう支援できれば幸いです。



## 就任のご挨拶



看護部長 作山美香

4月より看護部長として着任しました看護部長の作山です。

愛仁会リハビリテーション病院には2011年の新築移転の年に勤務しておりました。一日にして旧病院から新病院への移動した日のことがきのうのように思い出されます。

あれから7年が経ち、さらに病棟も増え、社会生活に最も近い回復過程を支える全国有数のリハビリテーション病院に発展し続けている活気ある病院で職員の一員として、自己の役割を果たしていきたいと思ひます。どうぞ、よろしくお願ひいたします。



リハビリテーション科 部長  
城戸崎 裕介

平成30年11月から勤務しております城戸崎と申します。

昭和63年卒業で、約30年間脳神経外科医として手術を行ってきました。

近年は外科手術よりカテーテル治療を望まれる患者さんが増え、満足度も高いことは否めず、外科医として一区切りを決意しました。

これからの医療は再生治療とリハビリテーションと確信しています。

微力ながらリハビリテーションの領域でお役に立ちたく精進する所存です。どうかよろしくお願ひいたします



高槻在宅サービスセンター センター長  
堂園 直美

4月から高槻在宅サービスセンターのセンター長となった堂園と申します。

リハビリテーション病院で副看護部長を3年務めました。在宅の分野に関しては、わからないことも多いですが、これから、ケアマネジャー、ヘルパー、訪問看護師やセラピストなどの多職種のスタッフと、地域の方々と共に、皆さんが「住み慣れた場所で、安心して生活が送れるよう」支援ができればと考えています。今後ともよろしくお願ひいたします。



地域クリニックとの連携の中で

Vol.22

# 白石クリニック

〒569-1123 高槻市芥川町1丁目13-14

TEL.072-669-7701

整形外科  
内科  
消化器内科



▲白石 将史院長、白石 奈々子副院長

## リハビリ等で日々お世話になっている白石クリニック 白石 将史院長、白石 奈々子副院長に インタビューさせていただきました。

### Q 開業されたきっかけは？

**A** 整形外科医として病院で主に手術などの診療に携わってききましたが、全ての患者さんが手術で完治する訳ではありませんでした。性質上、病院は患者さんを長期的に診ていくことは難しいですが、クリニックなら薬やリハビリなど、保存的な治療を続けていき経過を診ていくことができます。また、症状が悪化してからではなく、悪化する前の予防の段階から患者さんに関わることができ、より地域に貢献できると考え開業に至りました。

### Q クリニックの特徴は？

**A** 診療科は整形外科、内科、消化器内科で、各診療科全般のご病気を診させていただいています。整形外科疾患でかかっている患者さんでも、内科的なご病気も診させていただくことが可能で、クリニック内で連携を密に図り診療させていただいています。

リハビリにも力を入れており、4名の理学療法士がおり、転倒予防や筋力トレーニングなどを受けていただくことができます。理学療法士は更に増員予定で、今後作業療法士も採用する予定です。

内視鏡検査も実施しており、胃カメラや大腸カメラの検査を受けていただくことができます。女性医師が対応していますので、女性の方も安心して検査を受けていただくことができます。また、大腸カメラは検査前に処置が必要ですが、プライベートに配慮したお部屋で処置を受けていただくこともできるようにしております。

### Q 地域の方々へ一言お願いします

**A** 地域のかかりつけ医として様々なお悩みに対応できる体制を整えていますので、お身体のことでご不安がありましたらお気軽にご相談ください。

クリニックは明るくきれいで、3階には大きなリハビリ室がありました。

先生方はとてもやさしく対応して下さい、

患者様お一人お一人を温かく診察されているのだと感じました。

白石先生お忙しい中ありがとうございました。

### 内科・消化器内科

診療時間	月	火	水	木	金	土
10:00~12:00	●	●	●	●	●	●
9:00~13:00	内視鏡検査 予約制					

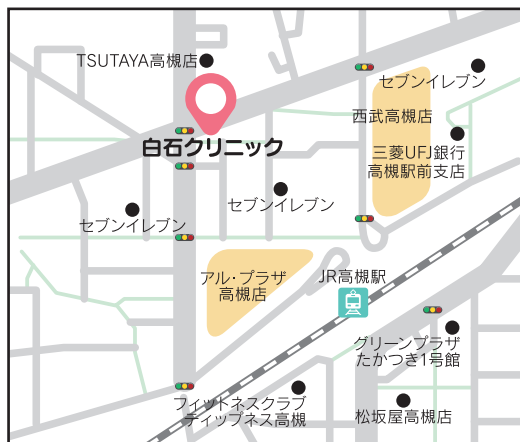
【休診日】木曜午後/土曜午後/日曜/祝日  
※外来診療は午前中のみです

### 整形外科

診療時間	月	火	水	木	金	土
9:00~12:00	●	●	●	●	●	●
16:00~19:00	●	●	●	—	●	—

【休診日】木曜午後/土曜午後/日曜/祝日

アクセス JR京都線「高槻駅」より徒歩3分



# INTERVIEW

## インタビュー

Yさん(80代・男性)

Yさんは一昨年の夏に脳梗塞を発症しました。言葉がうまく話せず、食事を飲み込む機能も低下しており、口から食べることが難しい状態でリハビリ目的に当院に入院されました。

約4カ月のリハビリテーションを経て、歩行や階段昇降、口から食事ができるようになり、自宅退院されました。

現在は奥様、愛猫と一緒に暮らしています。今回は奥様にお話をお伺いさせて頂きました。

### Q 現在の生活はいかがですか。

A. デイサービスを週3回、訪問看護を週1回、言語聴覚士の訪問リハビリを2週間に1回、時々ショートステイを2泊程利用しています。近くの理髪店に月2回行くことを楽しみにしています。暖かくなったら、近所を散歩する予定です。

### Q 入院中や退院後の様子をお聞かせください。

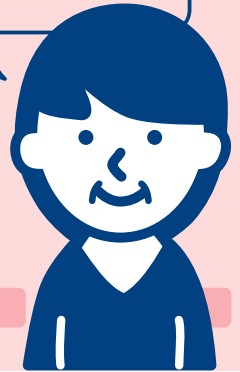
A. 入院中は体重が減って心配でした。退院後もしばらく不安でしたが、生活に慣れたら特に大変さは感じませんでした。



退院の時、主人が家に帰ったら猫がとても喜んで、ずっと主人の膝の上に座っていました。今も猫は主人の部屋で過ごしています。

Yさんは入院中より少しふっくらした印象で、「いらっしゃい」と笑顔で迎えてくださいました。Yさん、奥様、今回は貴重なお話をお聞かせ頂きありがとうございました。

地域医療部 琴浦 友理



## 愛仁会高槻在宅サービスセンターだより

脳出血を患われたNさんは愛仁会リハビリテーション病院を退院後、継続してリハビリに取り組みながら在宅生活を送っています。週に3回の訪問リハビリを受けており、かつリハビリ型デイサービスも週3回利用し、身体機能の維持向上に努めています。

特に自宅で実施する訪問リハビリでは、筋力・持久力向上の訓練のほか日常生活動作である着替えやトイレ動作の自立に向けた訓練を受けています。安全な外出ができるよう玄関の出入りや自宅周辺の歩行訓練の実施、日常で行う自主トレーニングの指導も受け実践しています。これらの集中したリハビリの成果がみられ、少しずつ動作が安定している状況です。復職することを目標としているNさんを、奥様は傍で励まし気持ちに寄り添いながら



### リハビリに取り組みながら奥様と共に二人三脚の日々を送る

在宅サービスセンター ケアプランセンター ケアイ ケアマネジャー 村田 順子

共に過ごしています。自宅に訪問すると、なごやかな雰囲気の中、奥様が笑い、Nさんも一緒に笑って笑顔になる、そんなお二人が印象的です。ケアマネジャーはご本人やご家族の意向をもとに必要な支援の提供、その後の状況把握をしながら他職種とも連携しながら、日々の訓練に取り組み、長く続くNさんのこれからの生活を安心して送っていただくことができます。